

紹介

○日本文化史の研究

長 沼 賢 海 著

嘗て自分の發表した論文を一冊に纏めて出版しようとするとき、誰しも、其の書名は如何にすべきかには、大に悩まされる。初めから一冊の著書を目指して執筆するにしても同じ事について、苦心される。

著者は「日本固有文化」なるものは、よしや其の文化の根本になるものは海外傳來のものであつても、そのすべてが日本民族化され、日本國化されたならば、それを日本固有の文化と言ふべきであり、従つて日本文化史の一面は、謂はば海外文化の消化史であり征服史である。と言ふ主張を有し、日本文化史研究の一眼目を、こゝに置いて居られる學者である。而して本書は

一、鎌倉新佛教の展開と反本地垂迹神道、二、聖徳太子と夢殿。三、十七條憲法と玉佛兩法。四、佛法即王法觀。五、大野城及び四王寺遺蹟。六、水城の大樋と水城の性質。七、元寇の諸問題殊に神風。八、暗黒時代の一向一揆。九、宗盲人別改めの發達。十、伊曾保物語繪詞。十一、鐵砲傳來考。十二、天文以前の我が鐵砲。十三、元明に於ける火器と我が鐵

砲。十四、鐵砲傳來の再檢討。十五、鐵砲の傳來と其の普及。

の十五篇を收む。されば一見した所、各篇互に連絡する所がない様でもあるが、著者の前に言へる主張からすれば、所詮日本文化史の本流に注入する支流共でもあり得る。だが、日本文化史の研究も其の範圍をこゝまで擴大する事は差支ないにしても、以上の十五篇を日本文化史の研究と名づける事は、些か、どうかと思ふ。恐らく著者も其の書名には、並々ならぬ苦心を拂はれたのであらうが。

以上の十五篇中、何と言つても第一篇は本書中の腰巻で、何よりの雄筆で、この一篇だけでも本書が出版さるゝ意義があると思ふ。著者ならでは、手の付けられない問題である。中世を貫く太い思想の線に、反本地垂迹思想と神道論のある事は、誰しも認める所であるが、扱それでは如何なる方面にそれが現はれて居るかに就いて、殊に佛教者の方面に如何なる態勢を採つて現はれたかに就いては、容易に指摘する事は出来ないものであるが、著者の努力は、それに對して明答を與へたと言はねばならぬ。私は他力念佛と神道との關係、日蓮宗徒の神祇觀などに多くの教示を得た事を感謝する。

又、大野城や水城の研究は、著者が其の遺跡遺構の發掘調査に關與されたものであるだけに、多くの新知見を示されたものであつて、其の勞を多謝せざるを得ない。(菊版六〇頁、定價五・〇〇、教育研究會發行)〔中村〕

日本建築史講話

關野貞述

日本建築史の開拓者として關野貞先生の名は、伊東忠太先生と相並んで、燦として輝く。本書は關野博士が武藏高等學校の生徒のために五回(十時間)に亘りて講義された時の筆記を基とし、それを博士の手控によつて整理したもので、博士の校閲を経ない内に博士が易筆せられたから、同校教授原田亨一氏や足立康博士、大岡實氏等の助力によつて原稿を完備出版されたものである。

日本建築史に關する書物は相當上梓されたものがあるけれども、どうしても大部のものとなり、従つて専門的なものと成り勝ちであるために、初心者には難解であり、難讀である。さうした専門的な著書の存在もとより喜ぶべきものであるけれども、建築史を知りたいと念じつゝある人々のためにも容易に讀み得る建築史、それこそ現代學界の最も要求して居るものではないか。高等學校生徒程度の専門學書。それが最も必要な書物ではなからうか。其の觀點から言ふならば、本書は、其の要求に全く合致したものであり、本書印行を企てた人々も亦其の要望を耳にせられたのであらう。原始時代、飛鳥時代、寧樂時代、平安前期、平安後期、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、明治時代の各時代に區分して、それ〴〵佛寺、神社、住宅の建築を説き、古代に於いては墳墓に、室町時代以後には

茶室に、桃山江戸には城郭と靈廟に、言ひ觸れ、一通りの古建築史を理解する事には、頗る役立つ。加ふるに附載として、「日本建築重要遺構一覽」「建築用語解説並附圖」「建築用語索引」の三種が冊尾に添へてある事は、どこまでも初心者に親切な用意と言へよう。

關野先生のかうした一貫した建築史と言ふものは、外には一冊も纏つて居ないのであるから、其點で、先生の建築史に關する大系を窺知するためには唯一のものであり、それだけでも本書出版の價値は大きい。但し、披讀して行つて、何となしに型が古い、と言ふ感のする事は否まれない。従つて、讀む者に對する迫力が弱い様にも思はれる。

それにしても、かうした講義を生徒に必聽せしめ、其の方面から少とも「日本」といふもの、正しい認識を培はんとされつゝある山本良吉先生の苦心には、多大の敬意を表する。(岩波書店發行、四六版二五八頁、定價一・二〇)(中村)

○建國神話論考

三品彰英著

「古代朝鮮に於ける王者出現の神話と儀禮」「古代朝鮮の政教と穀靈信仰に就いて」等の雄編によつて本誌の讀者にも夙にその名を知られてある三品彰英君は、今春外遊の途につくに先立つてその論考を輯めて一書とし、われら内國にあるものへの置土産とせられた。題して「建國神話論考」といひ、古代祭政と樹